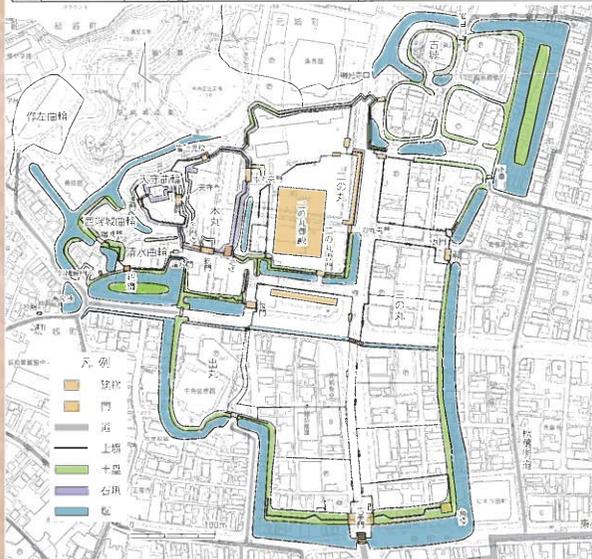


浜松城歴代城主と出土遺物

西暦	城主	支配者	関連出土品	できごと
1565	徳川家康・東照・清康	今川氏	徳川家康の御用印 徳川家康の御用印	1560(永禄三)年 格段間の戦い 1565(永禄八)年 今川氏真、既陣遺物を發掘 1568(永禄十一)年 徳川家康、遠江に侵攻 1572(元禄三)年 三方ヶ原の戦い、家康殿北 1578(天正六)年 浜松城築城(天正九年まで) 1579(天正七)年 信長の命で、徳川殿と信康を殺害
1570	徳川家康	徳川氏	徳川家康の御用印 徳川家康の御用印	1568(天正十)年 家康、秀吉の部下となる 1590(天正十八)年 秀吉、家康に関東移封を命ず 1598(慶長三)年 秀吉没する 1600(慶長五)年 関ヶ原の戦い 1601(慶長六)年 家康、東海道に宿馬制を制定
1600	(織代)豊田家政 堀尾吉晴・忠氏	豊田氏	豊田家政の御用印 豊田家政の御用印	1616(元和二)年 家康没する 1619(元和五)年 徳川頼宣、紀伊に移封される 1620(元和六)年 幕府、諸大名に大坂城の修築を命ずる
1609	松平忠輝		徳川家康の御用印	
1619	水野季仲			
1638	徳力忠房			
1644	松平康寿			
1655	大田資元・資次		大田資元の御用印 大田資元の御用印	1655(明暦元)年 大風雨により、浜松城内に被害
1674				1675(延宝三)年 小天童が彦助殿により縁切り 1680(延宝八)年 大風により、浜松城内に被害
1700	青山宗政・忠雄 忠善		青山宗政の御用印 青山宗政の御用印	1691(元禄四)年 城内の屋敷で火災 1700(元禄十三)年 城内の屋敷で火災 1706(宝永三)年 城内の屋敷で火災
1729	本庄(松平) 資保・資訓		本庄資保の御用印 本庄資保の御用印	
1729	松平清茂・俊輝			
1749	松平(半蔵) 頼綱・資盛			
1758	井上正経・正定 正常			
1800				
1817	水野忠雄・忠格			1822(文政五)年 徳川家康を尊称する
1845	井上正章・正成			1854(安政元)年 翌年にかけて2度の地震で被害 1860(万延元)年 天幕川が決壊し、城下に被害 1869(慶応四・明治元)年 戊辰戦争、明治と改元
1868				



【用語解説】

- ◆平山城(ひらやまじろ)

城の立地による分類の一つ。低い山・丘とその周辺の平地を利用して築かれた城。
- ◆天守(てんしゅ)

三階、四階建ての大櫓(おおやぐら)を祖とする建物。一つの城の象徴として高い格式を誇った。
- ◆曲輪(くるわ)

城を構成する木丸・二の丸などの区画。郭とも書く。
- ◆石罫(せきりい)

曲輪の周囲に石垣を築き固めた土手。
- ◆土塙(どべい)

城を取り囲む壁や罫の上に建てられる塙で、木材の骨組に土を塗り固めたものと、骨組を持たず使用済みの瓦や小石・砂利等を芯にして土を固めたものがある。
- ◆武者走(むしゃばしり)

罫の上に立てられた塙や柵の内側の通路部分のこと。また、天守や櫓の身舎の周囲に廻された通路状の部分。
- ◆鉢巻石垣(はちまきいしがき)

土壁の上部に石垣を築いたもの。高く石垣を積み技術が発達する前の段階の特徴といえる。
- ◆野面積(のづらづみ)

石垣の積み方的一種で、自然の石をあまり加工しないで積み上げたもの。
- ◆裏込(うらこめ)

石垣の背後に排水と補強のために詰められる小石のこと。
- ◆安政元年浜松城絵図(あんせいねんはままつじょうえず)

安政元年(1854)に地震で倒壊した浜松城内施設を記した絵図。
- ◆家紋瓦(かもんがわら)

軒瓦の一種で、軒に家紋をあしらった瓦。浜松城では城主が替わるたびに置き替えられていた。

◀江戸時代の浜松城復元図

浜松城は、江戸時代になると、徳川譜代の大名が治める城となり、二の丸御殿の建設や三の丸への拡大整備が行われました。浜松城と一体になって整えられた城下町とともに、政治・経済の拠点として栄えました。

※注意事項

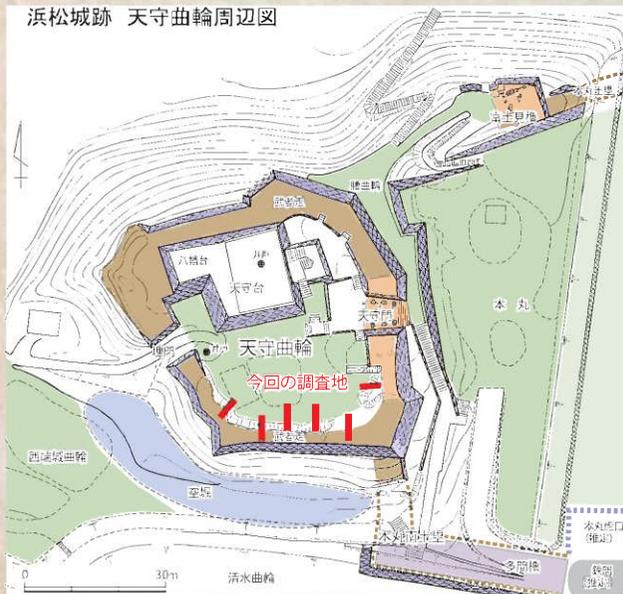
- ・新聞やテレビ、ホームページで現地説明会の様子が紹介される可能性がございますので、あらかじめご了承ください。
- ・SNSやインターネットに写真を投稿する際、個人が特定されるような写真は掲載を控えていただくようお願いいたします。

浜松市文化財課(地域遺産センター)
TEL: 053(542)3660

はままつじょうあと
浜松城跡 23 次
— 発掘調査現地説明会資料 —

浜松市文化財課(浜松市地域遺産センター) 2018年2月10日

浜松城跡 天守曲輪周辺図



天守曲輪周辺図(安政元年浜松城絵図)



浜松城跡

浜松城は、三方原台地の東縁にあたる段丘を利用した平山城で、浜松城下町は現在みられる浜松市街地の原点となっています。浜松城は、15世紀頃に築かれた引馬城(ひくまじょう)が前身となり、元龜元年(1570)に入城した徳川家康が浜松城と改称し、武田信玄に対する前線基地として拡張、整備されました。その後、家康の関東移封に伴い入城した豊臣氏家臣の堀尾吉晴によって高い石垣と天守をもつ豪壮な城郭として姿を変えました。現在、浜松城公園に残る石垣は、その時代に築かれたものとみられます。江戸時代に入ると、城主は代々徳川譜代の大名が務めることとなり、浜松城主となった多くの大名のちに幕府の要職に就いたため、「出世城」としても知られるようになりました。

今回発掘調査した天守曲輪(てんしゅくるわ)は、堀尾吉晴が城主の時代に築かれたとみられます。天守曲輪は掛川城や和歌山城などにも見られますが、類例は決して多くありません。掛川城や和歌山城は豊臣秀吉との関わりが深い人物が築城しており、天守曲輪は秀吉と深くかわる遺構ともいえます。浜松城の天守曲輪は、東西約56m、南北約68mのいびつな多角形をしています。これは自然の山の形を反映した結果と考えられ、石垣づくりの曲輪としては古相を留めた姿といえます。こうした複雑な形状は、迫る敵に側面から攻撃を加えやすくするための工夫でもありました。

調査成果

今回の調査では、天守曲輪南側石塁の6箇所を発掘調査し、石塁の構造の解明を目指しました。浜松城の中核ともいえる天守曲輪の本格的な発掘調査は今回が初めてで、調査によって石塁の構造や曲輪の高さなどが明らかとなりました。

石塁の内側では、高さ2.0m（9段）の石垣が確認されました。石垣は自然の石を加工せずに積み上げる野面積（のつらづみ）と呼ばれる方法で築かれています。石垣が確認されたことで、石塁は内側からみて高さ3.2m、幅7.2mであったと分かり、江戸時代の絵図にも描かれている石塁が今回の発掘調査で初めて確認されました。また、曲輪内の当時の地表面が、現在の地表面より2.5mも下であったことが判明し、浜松城の天守曲輪の構造や用途を探る上で重要な成果を得ることができました。

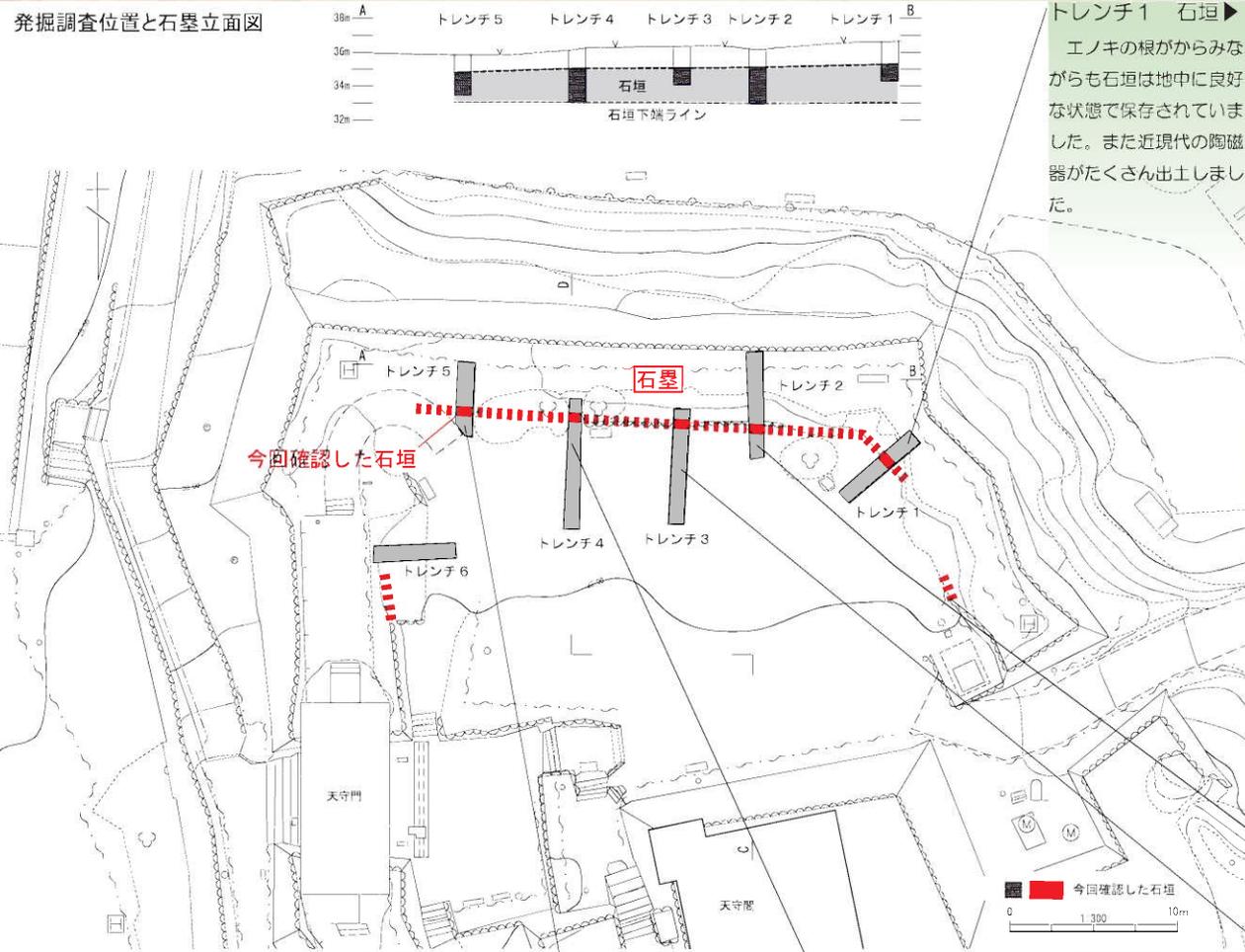


トレンチ5出土瓦

▲出土遺物

今回の調査では、瓦が多く出土しました。城主の家紋があらわれた瓦や鯉瓦もみられます。

発掘調査位置と石塁立面図

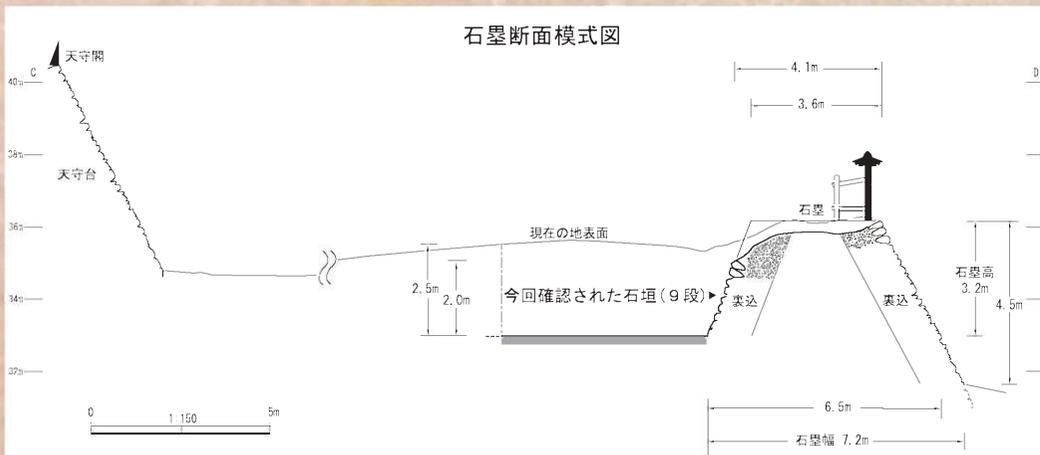


トレンチ1 石垣▶
エノキの根がからみながらも石垣は地中に良好な状態で保存されていました。また近現代の陶磁器がたくさん出土しました。



トレンチ2 石垣▲
石垣がよく観察できます。

石塁断面模式図



▶トレンチ4 石垣

現在の公園見切縁石の下に深さ2m以上にもわたって石垣が埋まっていました。

◀トレンチ5 石垣

残りの良い丸瓦など大量の瓦が埋まっていました。



▼トレンチ3 石垣

